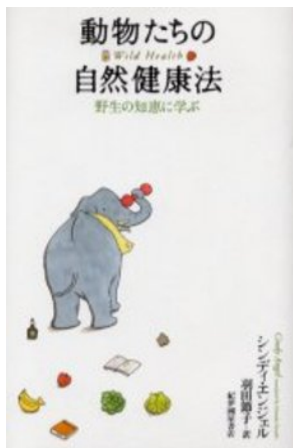


# 動物たちの自然健康法

Wild Health—how animals keep themselves well

and what we can learn from them



タイトル	「動物たちの自然健康法—野生の知恵に学ぶ」 Wild Health
原題	—how animals keep themselves well and what we can learn from them
著者	シンディ・エンジェル(Cindy Angel) Angelではなく、Engelでは？巻末参照
訳者	羽田節子
出版社	紀伊国屋書店
発売日	2003年11月1日
ページ数	366p

「発熱しているイヌは静かな隅っこで休むが、胃の具合の悪い時は草を食べる。彼らはどの草を食べればいいのか、誰にも教わらないが、吐くのに役立つ草や気分がよくなる草を本能的に探し当てる。(アメリカ人の医者)」

「象が病気になると、象使いは象を森に連れていく。そこで象は必要な薬草や植物をつかむ。なぜか彼らは自分自身の薬を処方できるのだ。(インドの象使い)」

本書の「はじめに」の一番最初に出て来る文章です。著者は「私たちはもっと野生動物の健康維持活動に学ぶべきだ」と主張します。

雨の日も、風の日も、雪の日も欠かさず散歩に連れていく我が家の柴犬にもそのまま当てはまることが多いので早速読んでみることにしました。このような動物の自己治療に関するまとまった本は世界でも珍しいのではないのでしょうか。

著者は、哺乳類の行動と生理の研究で Ph. D を取っています。膨大な文献にもとづいて、医学も医者も持っていない様々な動物たちがとっている自己治療の方法をこと細かに述べています。

まず、目次をながめてみると、

1部 野生の知恵

2部 健康の驚異

3部 学ぶべき教訓

第1章 野生動物の健康

第5章 毒物

第15章 飼育下の動物

第2章 自然界は薬の宝庫

第6章 眼にみえない敵

第16章 健康になろう

第3章 食物、薬、自己治療

第7章 怪我と骨折

第4章 生き残りのための情報

第8章 刺す虫！

第9章 洗る主と招かざる客

第10章 ハイになる

第11章 精神病

第12章 家族計画

第13章 死との遭遇

第14章 これまでにわかったこと

地球上に植物や動物が出現すると、それらに取り付いて栄養を得、繁殖しようとする他の生物がたちまち現れます。それらは細菌、黴あるいはウィルスであり、時代が少し下ると、他の動物に寄生して生きようとする動物、いわゆる寄生虫も次々と現れます。

このような生物にとりつかれると、何らかの病気になり、苦しんだり、消耗したり、繁殖力を失ったり、死んだりします。それは、自分の子孫を残していこうとする生物たちにとっては、致命的な問題でした。生物たちはそれを避けるために雄と雌という「性」を発明します。すなわち、病原体に抵抗力を持つ遺伝子を子孫に取り込むために、雄と雌の間で遺伝子の混合が起こらないと子孫が出来ないようにしたわけです。

動物たちが天然の薬を使って自己治療するという観察は、古代文明までさかのぼると言われています。ところが、研究者たちは、こういう話を受け入れることを渋っていたようですが、最近になって、研究者自身が間違いなく自己治療にみえる動物の行動に注目し始め、この話を捨て去ることなく記録し始めているようです。

すなわち、実験畑の研究者たちは野外観測者たちを検証もできないただのお話を語っている人達だと見下していましたが、野生動物の長期にわたる野外研究は、研究室の実験では決して学べないことを教えてください。動物同士の触れ合いや動物と環境の相互作用は室内では十分に研究することが出来ないからです。

もし、野生動物が自己治療を行っているのであれば、

(1) 新薬を探す医薬業界――COP10 遺伝資源の利用に関連

(2) 野生動物の保護と管理を改善したいと望む野生動物保護関係者――生物多様性に関連

(3) ペットの健康を守りたい飼い主

(4) 家畜を健康に育てようとする酪農家や養鶏業者  
達にとっても、その意味するところは絶大です。

本書の面白そうなところをいくつかピックアップしてみましょう。

1970年代にシエラランド島で鳥の研究をしていた研究者たちが見たものは、「頭のないひなの死骸」、「肢や翅をもがれたまま生きているアジサシのひな」でした。犯人は、カルシウムを求めて生きているひな鳥の足の「骨だけ」を引き抜いて食うヒツジでした。また、1999年の中国探検では、野生のラクダの死骸の側を通りかかったとき、乗っているラクダが首を伸ばして頭骨をガリガリ食べ始めたというミネラルを調達する動物たちが出てきます。

ベネズエラ中央部の大平原にすむオマキザルは雨季の洪水中に昆虫、とりわけ蚊の猛攻撃を受ける。この時、彼らは有毒なベンゾキノンを分泌するヤスデを利用します。この化合物は昆虫の「忌避剤」でもあり「抗菌物質」でもあるのです。長さが8cmもあるこのムカデ(これは大きい!)を見つけると、オマキザルはそれをさすったり、転がしたりして、防御用の毒を放出させ、それを体に塗りつけています。かゆみを抑える塗り薬にするわけです。

ブラジルのタテガミオオカミの寄生虫対策は面白い。タテガミオオカミはロベイラというトマトのような実が好物です。ロベイラには腎虫(ジンチュウ)という寄生虫(線虫)を駆除する力があります。この虫は成長すると幅1cm、長さ1mにもなり、徐々に腎臓を破壊し宿主を殺すことで知られています。タテガミオオカミは分布域全域で絶滅が危ぶまれているので、飼育で繁殖させようと努力が重ねられてきましたが、飼育下ではロベイラを食べられないので、オオカミは腎虫のために死ぬそうです。

ヤドリバエに寄生されたヒトリガの幼虫(クマケムシ)は、ドクニンジンなど普段は食べない毒性の強い植物を食べます。ドクニンジンを食べた寄生された幼虫は、ドクニンジンを食べない寄生された幼虫より生存の確率が高いと言われています。研究室内では、大部分のクマケムシは死んでしましますが、屋外で育てたクマケムシは毒ニンジンのおかげで生存率ははるかに高かったそうです。

チンパンジーの「マジックテープ効果」は面白い。チンパンジーは腸結節虫を駆除するために、たびたび葉をのみこみます。ところが、研究者が調べたところ、葉を飲むこ

との科学的根拠がない事に気付きます。ある時、飲み込まれた葉が排出されたばかりの糞の中身を見て驚いたのは、虫が何匹か葉の表面全体にある微細な鉤状の剛毛にひっかかって生きたままのたうちまわっているのを見つけたからです。虫は葉に含まれる化学物質で殺されたのではなく、ざらざらの葉にひっかかって物理的に体外に放出されたというのです。

養鶏産業は、できるだけ早く餌を肉に変えることを続けてきました。1980年代はじめにはブロイラーが育つのに84日かかっていましたが、今日ではその日数は半分に短縮されています。そのため、ニワトリは巨大な筋肉の重荷を支えられるほど循環器や心臓が発達しないうちに、ブロイラーは筋肉を蓄えることになり、その結果循環器障害や「心臓病」にかかるわけです。その上、余分な体重を支えるほど骨が強くなく、肢の弱ったニワトリは「自動餌やり器」や「水やり器」にたどり着けず、飢死したり渴き死んだりするそうです。また、ニワトリは興奮したり互いに喧嘩しないように、薄暗い室内で飼われるので、彼らは仲間の死骸を踏み歩き、自分達の酸性の強い糞で肢はただれ、アンモニアの蒸気と埃と細菌で肺は冒されています。不健康なニワトリはそれを食べる人間にとっては健康上の脅威です。

暑い季節に、換気の悪い小屋で1,000羽ものブロイラーが死んだことがあります。この問題については、動物の自己治療の研究が役立つといいます。暑さのストレスにはビタミンCの投与で解決するというのです。その解決法は養鶏業者にとっては朗報ですが、これらの哀れなニワトリたちにとっては何の解決にもなりません。

このような、ニワトリ(ブロイラー)の生きざまは環境保護団体からクレームが出そうな状況であり、飼育下の動物の何とも悲惨な光景には考え込んでしまいます。

現在の精神活性剤のほとんどは、昔の人が動物を観察して発見したものといわれている。精神的な苦痛を受けたマウスの方が、肉体的苦痛(痛み)を受けたマウスよりも麻薬に手を出しやすいそうである。

行動の自由のない動物園の動物はノイローゼや食餌に関する異常をひきおこしやすい。その他、治療のみならず麻薬やアルコールの中毒、痛みの緩和、死の捕らえ方にも言及しています。

さて、医薬品や有用な化学物質の中には、「生物がいなければ開発できなかったものが非常に多い」ことが知られています。中には、森の中の動植物を医薬品などとして伝統的に利用してきた「先住民の知識」が手掛かりになることも少なくありません。

2010年10月18日から、名古屋市で、生物多様性条約の第10回締約国会議(COP10: The **tenth meeting** of the **C**onference of the **P**arties)が開催されます。

この条約では、三つの目標を掲げています。

その1は、地球上の多様な生物をその棲息環境と共に保全する。

その2は、生物資源を持続可能であるように利用する。

その3は、遺伝資源の利用から生ずる利益を公平に配分する。

です。

COP10の大きな議題の一つに、「様々な生物から見つかる化学物質の所有権は誰のものか」という問題があります。本書は、これらの疑問にヒントを与えてくれる一冊でもあります。

「はじめに」にある、「ご意見は、私のサイトへ」とあるので早速訪ねてみたところ、ポルノサイトだったのでびっくりしました。それはともかく、本書には野生動物たちのびっくりするような自己治療にまつわる興味深いエピソードが、次から次へと出てきます。皆さんも、読み進めるうちに身近な出来ごとに思い当たるところがあるのではないのでしょうか。

自己治療の他に、動物でもアルコールやドラッグに溺れるものがある等、奇妙な話が満載されている楽しい本です。私にとっては、動物を飼うことの意味を認識し直す一冊でした。この種の本は非常に少ないので、是非読んでみることをお勧めします。

2010.10.20